

死を意識せざるを得ないなかで困難な状況に陥っている患者・家族の持てる力が発揮されるための実践上の指針

恒吉さやこ（応用看護学）

【キーワード】 困難な状況、家族、回復力、持てる力、認識

本研究の目的は、死を意識せざるを得ないなかで困難な状況に陥っている患者・家族の困難な状況と、患者・家族の持てる力が発揮されていく過程を明らかにし、死を意識せざるを得ないなかで困難な状況に陥っている患者・家族の持てる力が発揮されるための実践上の指針を得ることである。研究対象は、死を意識せざるを得ないなかで困難な状況に陥っている患者・家族への自己の看護過程8事例10場面である。研究方法は、全看護場面を再構成し、対象の変化と看護者の認識と言動に着目しながら各看護場面の意味を取り出し、全事例において「患者・家族が陥っている困難な状況」、「患者・家族の持てる力が発揮されていく過程」、「患者・家族の認識の変化をもたらした看護者の認識と表現」を明らかにした。それをもとに、対象特性やその時の場面の状況をふまえて共通性と相異性を吟味し、全事例から「患者・家族が陥っている困難な状況の特徴」、「患者・家族の持てる力が発揮されていく過程の特徴」、「患者・家族の認識の変化をもたらした看護者の認識と表現の特徴」を明らかにした。それらの特徴から以下の指針を導き出した。

- ・患者に強い症状が生じ、それによって家族も強い不安を抱いているときには、患者の回復力に目を向けて伝え、家族が患者に備わっている力に着目でき、自分の存在が患者の力を支えていることを感じることができるよう、そして今後の方向性を前向きにイメージできるように関わる
- ・患者・家族が生命力の小さいなかで、根本的治療の限界や病状の急激な変化に直面しながらも新た

な治療に目を向けなければならないとき、認識が揺さぶられていることをふまえながら、新たな治療について患者の位置からイメージできるように、そして患者にとって何が最良かを自分たちで選択し、前に進むことができるように支える

- ・患者が自分の生命が終わりに近づいていく像や家族への思いを表出し、それに対して家族の認識も揺さぶられ双方の思いにずれが生じているとき、それぞれの思いを迫体験しつつ症状や治療の意味を患者の健康的な部分や持てる力、家族の支える力とつなげて伝え、患者・家族が互いの存在に目を向けて思いを表出・受容し、家族全体の絆を深め、持てる力を発揮できるように関わる

看護者は、患者・家族に三重の関心を注ぎ、患者・家族が陥っている困難な状況のあり様とその消耗を見抜き、家族全体を支えていくことで、患者・家族は持てる力を発揮することができる。